

### 3 県内教育委員会担当者からの実施報告

ア 宇都宮市における学校支援地域本部事業の効果について

宇都宮市教育委員会事務局生涯学習課 社会教育主事 高田 玄

本市は学校と地域の連携を重視しており、平成 18 年度より設立した「魅力ある学校づくり地域協議会」において、学校と地域の連携強化を推進してきた。魅力ある学校づくり地域協議会（以下「地域協議会」）は小学校 68 校、中学校 25 校の全校に設置されており、そのうち 53 の地域協議会が学校支援地域本部事業を受託した。

受託した協議会と未受託の協議会の活動状況は次の通りである。（数値は平均値）

	主 な 活 動	受託校 (53 校)	未受託校 (40 校)
1	学習支援活動（教科補助、総合的な学習 等）	47.2 回	16.5 回
2	学習支援活動（読み聞かせ）	32.5 回	13.4 回
3	部活動指導	4.1 回	1.3 回
4	校内環境整備（花壇整備、遊具の塗装、図書修繕 等）	19.5 回	7.2 回
5	運動会、文化祭の支援	1.8 回	1.0 回
6	登下校安全指導（見守り）	121.5 回	68.5 回

学校支援本部事業を受託した協議会は未受託の協議会と比べ、書写や家庭科、生活科、読み聞かせなどにおける学習支援活動や部活動支援、図書室等の校内環境整備などの回数が多くなっていることから、受託した協議会においては学校支援活動が数多く展開され、地域の大人と児童生徒の交流が十分に図ることができている。

地域協議会活動に多くの地域の大人がかかわることは、学校支援活動が充実するだけでなく、地域の活動者や地域団体間のネットワークが構築されるとともに、これから地域において活動を始めようとする大人にとっても良いきっかけとなっている。学校支援活動を通して人と人がつながり、自ら地域の子どもたちを育てていこうとする意識の高まりが見られる。

また、地域コーディネーターの配置により、学校支援活動が充実するだけでなく、地域教育力向上フォーラムや地域ふれあい清掃などの地域教育力向上事業が行われたり、親学講座や親子料理教室といった親子交流事業などの家庭教育力向上事業が実施されたり、活動の広がりが見られる。それらの運営も学校の主導ではなく、会長や地域コーディネーターが中心となって運営している協議会が多い。この他にも、協議会が主体的に活動することにより、地域と学校の意見交換が進んでいる協議会もある。

さて、私自身も一条中学校地域協議会における活動者である。中学校の役割として、小中連携のコーディネーターもあるため、地域カレンダーの作成や親学などの合同研修会の開催、共通理解を図るための合同協議会の開催、地域教育力向上フォーラムの開催などを行っている。

一条中学校の地域コーディネーターは、学校支援本部事業の中で西原小学校において地域コーディネーターとしての経験があり、習得したノウハウを現在の活動に生かしている。例えば、夏休みの作品整理を PTA 会員に呼びかけたところ、多くの会員が手伝いを行った。地域コーディネーターが中心となり、さまざまな事業に取り組むことで、PTA 活動の活性化につながるなどの効果も期待できる。

学校支援地域本部事業により、地域にネットワークが形成され、楽しみながら地域活動に取り組む活動者が増え、絆が生まれた。このことは地域が元気になっているとも言えよう。

## イ 佐野市における学校支援地域本部事業の効果について

佐野市教育委員会生涯学習部生涯学習課社会教育係長 副主幹 須藤 孝浩

佐野市では、佐野市立北中学校区（北中、犬伏小、犬伏東小、城北小）で、学校支援地域本部事業に取り組んできた。3年間の委託事業は終了したが、23年度も学校支援地域本部における活動は継続されている。本事業を推進したことによる保護者や地域住民等の変化と事業の効果について紹介したい。

### 1 学校支援ボランティアの増加

本事業の学校支援ボランティア募集は、従来のチラシ配布に加え、コーディネーターの地域住民等への働きかけにより行った。

学校支援ボランティア数は、20年度31人（初年度は実質半年の活動）、21年度108人、22年度152人、23年度156人（11月末）と増加している。このうち、本事業以前から学校支援ボランティア活動をしていた人は15人であり、本事業が、多くの保護者や地域住民が学校支援ボランティアとして社会貢献を始める契機となっている。

### 2 活動継続者の増加と活動の広がり

学校支援ボランティアのうち、次年度以降も活動を継続している人は21年度12人、22年度55人、23年度66人と増加している。このうち、子どもが卒業した後も地域住民として活動している保護者や、学生として携わっていた人が卒業後も地域住民として活動している例も見られる。

また、学校支援ボランティアの中には、当初活動した学校・分野以外での活動に取り組む人も見られるようになってきた。今年度は、同一校で複数の分野で活動している人18人、複数の学校で同一の分野で活動している人14人、複数の学校で複数の分野で活動している人14人、合計46人の人が、活動の幅を広げている。

これらのことから、保護者や地域住民の活動への取り組みが、受動的なものから主体的なものへ変化してきたことがうかがえる。

### 3 学校支援ボランティアのスキルアップ

自らの活動を充実させるため、スキルアップを図る学校支援ボランティアが見られた。具体的には、読み聞かせボランティアの改めて基礎を学びたいという要望による研修会の開催、活動を円滑に進めるためにパソコンの操作を学び始めたボランティア、今後の活動に生かせる可能性のある地域の歴史や手芸等を学ぶ、ボランティアによる自主研修の企画開催である。

これらの事例から、保護者や地域住民の、地域の教育力としての自覚の高まりが感じられる。

### 4 公民館サークルの参加

公民館サークルに本事業への参加を呼びかけたところ、写真サークルによる学校内への作品展示が始まった。当初、通常の風景写真のみの展示であったが、より児童・生徒の関心を高めたいと、大きく引き伸ばした写真や加工を施した写真の展示、加工方法の説明文の掲示も行われている。現在は、水彩画サークルも加わり、多くの作品が展示されている。

このように、本事業が団体の活動成果を生かす場となり、団体の新たな活動意欲を生み出している。

### 5 人と人のつながりの変化

学校支援ボランティアの情報交換と交流の場としてボランティア交流会を開催している。この交流会で、他校で同じ分野で活動している人たちが知り合い、グループとして活動を始めた事例や、新しい分野で活動する契機をつかんだ人もおり、新たな仲間作りの場として好評を得ている。

今まで、同じ学校に通う子どもを持つ保護者の関係や、同じ地域に住む住民の関係であった人たちが、学校支援ボランティアとして同じ活動に取り組むことにより、それまでの顔を知っているだけのつながりから、より深いつながりへと変化している。

本事業により、保護者や地域住民等の、同じ地域の子どものに係わる者としての連帯感が強まっている。

### 1 アンケートの調査から

事業終了後、人材バンクに登録した学校支援ボランティア74名に対して、アンケート調査を実施した。そのうち38名の方から回答を得た。(回収率51%) (表1)

1番多かった回答が「学校や子どもの様子がよくわかってきた。」25名(66%)であった。地域の人にとって、学校を外から見るより、学校支援ボランティア活動を実際に行い学校の中に入ったほうが、学校理解、子ども理解が深まると考える。

2番目に多かった回答が「いろいろな人と出会う機会が増えた。」22名(58%)であった。人と出会う機会が増えると、学校について、子どもについて、地域について話をするが多くなると考える。このことは、4番目に多かった回答「学校や教育のことについて、周りの人と話をする時間が増えた。」につながる。

3番目に多かった回答が「地域の子どもに対する関心が深まった。」21名(55%)であった。実際、下校中の子どもたちに対して、「声をかけるようになった。」という声も聞こえた。

5番目に多かった回答は、「学校以外でも地域のために何かやってみたいと考えるようになった。」10名(26%)であった。この回答者が、具体的に何をしたかは不明だが、このあと公民館事業や子ども会、学校行事などに影響を与えていると考える。

### 2 学校支援ボランティア活動の内容から

以前は保護者中心であった学校支援ボランティア活動が、地域住民が協力する学校支援ボランティア活動になっている。特に、今まで保護者中心であった読み聞かせボランティアに地域の方が入るようになったり、今までPTAが中心であった奉仕作業に地域の方が参加するようになったりしている。また、各教科や総合的な学習の時間において地域住民のゲストティーチャーも増え、(杉並木を守る活動をしている方々、板橋の歴史を研究されている方など)地域住民が自分の能力を生かせる場となり、喜びや生きがいを感じている。これは地域コーディネーターの設置が大きく影響している。

### 3 公民館や他団体との連携・広がりから

落合公民館や落合中学校にできたピザ釜(これも地域ボランティアが作った。)を利用して、家庭科の授業で調理したピザを焼いている。この授業には、地域婦人会の方々が学校支援ボランティアとして協力している。婦人会の方は、毎回楽しみにしており、婦人会の会合にも積極的に参加するようになったと話していた。

公民館陶芸講座講師が、中学校美術部の支援をしている。そこで作成した抹茶茶碗を活用して、中学生が地域の方々の指導でお茶会を楽しむ授業も行われるようになった。

落合中学校で実施した「緑ヶ丘ふれ合い交流会」では、PTAはもちろん、「自治会」「公民館」「体育協会」「婦人会」「長寿会連合会」など18の団体が協力している。このとき中学生と一緒にグランドゴルフをしていた長寿会の方は、「この“緑ヶ丘ふれあい交流会”は、子どもたちが地域のことを考えるきっかけになっているのではないかと。私たちは、子どもたちから刺激をもらっている。楽しくて仕方がない。また、長寿会のみんなは、落合中学校卒業生なので、友達同士、その当時の話題で盛り上がり、昔を懐かしむことができた。」と話していた。

日光市 表1

回答人数 38 名(複数回答)

①学校や子どもの様子がよくわかってきた。	25	66%
②いろいろな人と出会う機会が増えた。	22	58%
③地域の子どもに対する関心が深まった。	21	55%
④学校や教育のことについて、周りの人と話をする時間が増えた。	11	29%
⑤学校以外でも地域のために何かやってみたいと考えるようになった。	10	26%
⑥生活に張り合いができた。	8	21%
⑦いろいろなことを学んでみたいと思うようになった。	7	18%
⑧学校に対して、さまざまな提案や意見を言うようになった。	2	5%
⑨よいことはない。	1	3%
⑩その他(少し分かってきた)	1	3%

## エ さくら市における学校支援地域本部事業の効果について

さくら市教育委員会生涯学習課副主幹兼社会教育主事 山口 信昭

### 1 さくら市学校支援地域本部の経緯

さくら市では、平成20年4月喜連川地区の小学校5校の統合に合わせ、その統合小をモデル校として「学校支援地域本部」を設置した。平成20・21年度は組織立ち上げの準備。平成22年度から「喜連川小学校地域応援隊」を立ち上げた。

### 2 事業効果について

喜連川小学校地域応援隊の活動も2年目を迎え、ボランティアやコーディネーター、保護者や地域の方たちそれぞれに変容が見られる。その一部を紹介する。

#### ○寒竹囲い作業

城下町であった喜連川地区には、「寒竹囲い」の家があり、それを保存する会がある。その会の代表には、学校正門の寒竹の定植から関わってもらい、毎年7月に行われる全ボランティア対象の寒竹囲いづくり作業においても指導をいただいている。その中で、地域交流・伝統文化継承が自然と行われ、2年目の今年は、保存会の作業に学校支援ボランティアが参加するようになったり、伝統の竹箆づくりの復活につながったりと、地域活動への広がりが生まれてきている。

#### ○総合的な学習の時間 ～3年 「ミニ観光ボランティアになろう」～

今年、指導主事・社会教育主事・学校担当者・コーディネーターが3年生の総合的な学習における単元の見直しを行っている。また、市民大学から誕生した観光ボランティアが、校外学習に参加し、地域の歴史や文化を子どもたちに伝えている。地域愛の醸成という学習効果につながるだけでなく、ボランティア自身が子どもたちの視点に驚き、新たな観光のポイントと考え、自分たちの研修テーマとしている。

#### ○ボランティア交流会

市教育委員会として、本事業の目的の1つに「統合した地域同士の連帯感の構築」があり、学校を会場とした小さな地域づくりを行っている。その1つとして、コーディネーター（4名）の立案により、年4回の全ボランティア対象の「交流会」や「応援隊アート展」などを行っている。この交流会をきっかけに、地域団体や活動連携なども生まれてきている。例えば、小学校近くにある石蔵で、毎月1回“駄菓子屋”を開催しているが、その駄菓子屋を運営しているボランティアが、交流会で知り合った日本茶のインストラクターと連携し事業を行うなど、学校外でも週末の子どもの体験活動を支援するようになってきている。

2年目を迎えその他の活動においても、「子どもたちにはこうしたらいいのではないか。」という思いや「更に地域交流を深める」という観点などが生まれ、ボランティア自身の取り組み方が変わってきている。これこそが地域の教育力の向上の1つになるのかもしれない。統合小での学校支援事業においては、地域の大人だけでなく、子どもたちの将来を見据えた100年後の学校・地域づくりを目的とし、更に学校・地域愛が高まるような粘り強い行政の姿勢やコーディネーターと連携した住民参画の工夫が必要であると考えられる。

その他にも、こんなことが…。

お琴のボランティア…①学校の学習相談会（6月）において先生から「伝統楽器であるお琴を子どもたちに見せたい」と要望があり⇒②ボランティアは学校から教科書を借用し学習⇒③12月授業に参加予定

応援隊アート展…H22コーディネーターの立案により、登録されたボラの発表の場の確保ともっと先生方に知ってもらいたいと目的でアート展（昇降口）を企画。

#### 波及効果



H23には、教務主任から夏休みの「サマーチャレンジ」提案。⇒7月に講師地域ボラと教師の21講座の体験学習を2日間開催。

#### アート展に参加するボランティアの変容

H22陶芸の皿を出展⇒H23子どもが遊べる土鈴を出展。

H22絵画や書道などの展示物⇒H23体験できるものを取り入れる（ギター体験。土鈴）

⇒多様な出展（森林ボランティアが、伐採中みつけたリスの巣を展示）（着つけを勉強している読み聞かせボラ…帯締めを展示）

1年間、アート展を予定して作品づくり。子どもたちに〇〇させたいという思い。

ボランティアの工夫…遊び応援隊⇒子どもの道具を工夫して作成。（シルバー大学OBの活動の場。）

公民館の活動者（東京からの移住者）が、コーディネーターの声かけにより、裁縫ボラに参加⇒活動後のボランティアルームの一言「地域まご」と発言⇒ミシン機械直し（学校の状況等を知って直したいという気づきに）

保護者…読み聞かせに参画している。活動している保護者は、既存の経験者・小規模校からの保護者である。

- ① 子どもの様子を心配して②自分も友だちづくりを目的に参加。新設校でも、他校だったボランティアの方とも交流して、いきいき活動している。